

源五郎のけやき

作・大庭 桂

古い町並みを残す小さな町の、これまた古い少し壊れかけた赤松家という家の庭に江戸時代から二百年は生きているという年老いた「けやき」の木がありました。

赤松家の当主は七十三才の赤松源五郎（ゲンゴロウ）、妻は先年亡くなり、息子の源一郎、大阪から嫁に来た恵子、孫の源太郎（十一才）と暮らしています。源一郎は家業の薬屋のかたわら、町の観光協会の世話人をするのですが、源五郎と妻の恵子には頭が上がりません。かつては広がった赤松家の庭でしたが、手入れすることができず庭の大部分を町に委託しました。町はその庭を整地し、雑草が地面に生えないように「けやき」の老木とその根元の大石だけを残して、広い敷地をアスファルトでかためてしまいました。

（夏 ゲンゴローは単衣の浴衣を着流しにして、ステッキを振り回し怒っている）

ゲンゴロウ

「ヤイヤイ、町長。これはいったいどうしたことだ」

町長

「赤松のゲンゴロウさん。あなたがここの土地を町の好きなように使っていていいというから、やらせてもらったまでのこと。
あなたの注文どおり、ケヤキには、指一本触れてませんよ」

ゲンゴロウ

「こんなアスファルトで地面を固めおって（地団太を踏む）。
これじゃ草も生えないだろうが」

町長

（高笑い）「何ねぼけてるんですか、雑草が生えたら維持管理の人件費に金がかかる。
大量の除草剤を使えば、水が汚染される。草ぼうぼうだと、景観がそこなわれる。ながーい将来を考えるとです

な。こうしておくのが一番です。

多少金がかかってもこれが子孫のためというものです」

ゲンゴロウ

「おれはな、せがれの源一郎が町のためになるからと、あんまりうるさく言うんで土地を提供したんだぞ。しかし、このありさまはどうじゃい。」

こんな暑苦しいことになるんじゃないやったら、町になんぞ協力するんじゃないやなかった。もう、この土地は死んだもどうせんじゃ」

町長

「ゲンゴロウさん。あなたの跡継ぎの源一郎さんは、町の観光協会の仕事もよくつとめて下さって、ここの土地のことにしても……」

ゲンゴロウ

「まったくもう源一郎の阿呆が……なあんもアレには、わかつとらん。」

何が町のためじゃ。何が子孫のためじゃ。

このケヤキは、百年前の大火事の時燃え残ったたいせつな木じゃぞ。

この町の歴史をじつと見守ってきた、たった一人の生き証人じゃ」

（ゲンゴロウが、ケヤキを見上げて感慨にふけっている間に、町長はこっそり逃げ出す）

（嫁の恵子が、下手より登場。エプロンがけに ほづきを手にして家のまわりの掃除を始める）

（ゲンゴロウは恵子に気づき、つかつかとそばに寄ってステッキで板壁をさしながら命令口調で言う）

「恵子さん。ええか、黒い板壁に蜘蛛の巣がはると目立つからな。」

ゲンゴロウ

壁に蜘蛛の巣をはらせたままにしとるのは、家の恥じゃ。毎日、蜘蛛の巣をはらうのやぞ」

恵子

「はい、わかりました。おとうさん。」

（顔をゲンゴロウからそむけて独り言）

なんで私が壁の蜘蛛の巣はらいをせんならんの。あほらし。
私は、おとうさんから見たらただの掃除と賄いのお手伝いさんに過ぎないのよ。気を使ってもおかあさんが生きている時の方が仕事が半分だよっぽど楽だったわ。亡くなられた時には、やっと気楽になったと思っただけど、ひとつの家をきりまわす嫁というものが、こんなにたいへんだとは思わなかった。

(恵子、荒々しく壁にほうきを振り回して蜘蛛の巣をとり、ゲンゴロウが家の方へ去っていくのを見届けると、ほうきをほうり出して大きなためいきをつく)

「ああ、大阪へ帰りた。こんなめんどろな家なんかよ、アパートで親子三人水入らずで、気楽に暮らせたら・・・(うつとりとして)ええやるな」

(そこへ源一郎が、ハンカチで額の汗を拭きながら上手より登場)

源一郎

「ああ、いそがし。ああ、暑い」

恵子

「あなた、おかえりなさい。お早いですね」

(恵子に気付いて)

源一郎

「あ、恵子、こんな所に突っ立って、何してるんだ？ おまえは、いいなあ。」

「ぼーっとしていられて。おれは、忙しくて忙しくて、この暑さで汗だくや。」

「今から、観光協会の仕事で、お客さんを案内しなきゃならない。」

「着替えたらずぐに出かける。今夜は、帰りが遅いからな」

(恵子、つんとして)

恵子

「あ、そう」

源一郎

「着替え・・・出してくれよ」

恵子

「どうぞご勝手に、私はこの古い家の世話とお父さんのことではんまに忙しいんですから」

（恵子憤然として、やおらほうきを拾うと源一郎の足元を掃きだす）

源一郎

「機嫌悪いなあ・・・どうしたんだ」

恵子

「機嫌が悪いのは、お父さんよ。だいたいあなたがいけないのよ。」

さつきも、このケヤキのことで町長さんともめていたんだから」

源一郎

「まだ、そんなことでがたがた言ってるのか。この土地のことは、親父も承知のはずや。この町が伝統的な暮らしをだいじにしなから、時代にマッチした美しく生き生きした町になるように、皆が協力して町づくりに参加していかなければならないことは、分かってくれてると思つてたのに・・・観光協会の仕事だつて、最初に始めたのは親父だぞ」

恵子

「そんなこと私に言われても、お父さんと一日中あの古い暗い家でいつしよにいるのは私なのよ。あなたは、仕事だと言つて外を飛び回っているからいいけど。毎日、毎日・・・（急にしおらしくなつて）私、大阪に帰つてもつと気楽に暮らしたい・・・」

（源一郎、あわてながら声をひそめて）

源一郎

「だからいつも言ってるだろ。親父が居なくなつたら、この古い家、おまえの好きなようにリフォームすればいいつて。」

たのむから、しんぼうしてくれ、な、な。

あ、いかん。遅れる。おれ自分で着替え探すから、恵子おまえはケヤキの木陰で、少しのんびりしてたらいい。外の空気を吸つてな・・・」

（源一郎、恵子の肩をぽんぽんと叩いて下手の家の方へ去る）

（恵子、ほづきを手に下手にぼんやりたたずんでいる。小学生五人がランドセルをしょって『となりのトトロ』を歌いながら上手からやってくる）

＝ トトロ トトロ トトロ トトロ

だれかが、どこかで、こみちにこのみうずめて・・・
（伴奏なしアカペラで）

（こどもの一人がケヤキにかけよる）

「うわあ、でっかい木」

「これは、うちのゲンゴロウじいちゃんのケヤキだぞ」

「工事中はわからなかったけど、近くで見るとでっかいなあ」

「こんなでっかい木、お宮の境内にもないね」

「ゲンゴロウじいちゃんのケヤキって、トトロの木みたいだね」

「いいなあ。ゲンタロウは、自分とこにトトロの木があつて」

（こどもたち、ケヤキをさわったり、叩いたり、岩に上つたりする）

「あ、おかあさん、ただいま」

「おかえり、源太郎」

源太郎

恵子

源太郎

「じゃ、みんなあとでね」

「セミとりしよじ」

「じゃあね」

「またね」

（恵子、源太郎、下手の方へ、こどもたち上手の方へ去る）

そんなことがあってから、一ヶ月ほどたった夏が終ろうとしているある日のこと

（ゲンゴロウが、いつもの浴衣の着流しでステッキを持ち、下手からケヤキの下にやって来る）

（ケヤキの下に、幾枚かケヤキの葉が落ちている）

「やや・・・こんなに葉が落ちて（葉を拾い上げる）こどもたちがむしつたんだな。けしからん。」

（憤然として、下手に向かって大声を上げる）

恵子さん、恵子さん」

「はい。なんでしようか、お父さん」

（恵子、エプロンで手をふきながら走り出て来る）

（ゲンゴロウ、恵子にケヤキの葉をつきつけて）

「これを見える。こどもたちのしわざにちがいない。冬支度の落葉の時期には早いのに、わしのケヤキの葉が、こんなに落ちて」

（ゲンゴロウ、それだけ言うと落ちた葉に目を落とし、しょんぼりする）

（あわてて）「まあ、あの子たちったら、ケヤキにこんな悪さして・・・。」

恵子

ゲンゴロウ

恵子

ゲンゴロウ

恵子

お父さん、すみません。源太郎にはきつく言っておきます。すぐに、掃除しますから」

(恵子、ほうきを取りに下手へ去る)

(ゲンゴロウ、ケヤキの梢を見上げる。

すると、ケヤキの葉が一枚、梢からはらはら落ちてくる。

(ゲンゴロウ、あわてて)

「ヤヤ？子供たちのしわざじゃなかったか・・・」

(そこへ、町長が通りかかる)

町長 「やあ、ゲンゴロウさん。まだまだ、暑いですなあ」

(ゲンゴロウ、ステッキをふりあげて通せん坊する)

ゲンゴロウ

「町長さん、ちよつと待った。

あんたちょうどいいところへ来てくれた。これを見てもらおうか」

(ゲンゴロウ、ケヤキの葉を町長につきつける)

町長

「ほう、ケヤキの葉ですな。お孫さんと、夏休みの工作でもされますか」

ゲンゴロウ

(息をまいて)「何寝ぼけたことをいっつとるんじゃ。

あんたのせいじゃ。あんたのせいで、このケヤキは弱つとるんじゃぞ。

見てみい。まだ落葉には早いのに、こんなに葉が落ちて・・・。

こんなアスファルトで、地面を固めてしまったからじゃ。いっつたい、どうしてくれるんじゃ。

このケヤキは、もうだめかもしれん。

このケヤキは、わしの、わしの・・・」

(そこまで言いかけて、ゲンゴロウ、急によるめいて倒れる)

町長

「こりゃいかん。
おい、たいへんだあ。だれかあ。赤松さん。源一郎
さん。恵子さん」

二

赤松家の面々、近所の人達、走り出て来る。

「お父さん」

「動かすな」

「救急車だ」の声救急車の音近づく。

（舞台 暗転）

舞台、明るくなる。

下手に、源一郎、恵子。白衣を着た医者に詰め寄って尋ねる。

「先生、父はどんな具合でしょう?」

「ウーム。今は安定しています」

「あの、命に別状は・・・」

「ゲンゴロウさんは、心臓はお丈夫なのですが、今回は
高血圧による卒中ですからな」

源一郎

「先生、お願いします。なんとか、なんとか、父を助け
て下さい。お願いします。」

先生、このとおりです。（源一郎、頭を下げる）

（医者、難しい表情で）

「治療には万全を尽くしています。しかし・・・」

医者

源一郎、恵子

「しかし？」

医者

「しかし、なにせ卒中というのは脳の中の血管が切れてしまうのですから、命に別状は無くてもですね……」

源一郎、恵子

「命に別状がなくても？」

医者

「どれくらい回復するかは、今のところ申し上げられませんが……」

源一郎

「それじゃ、父は寝たきりになることもあるってことなんでしょうね？」

医者

「それは、今はなんとも……。
ご本人の意欲とご家族の励ましによるところが大きいのです」

（源一郎、恵子、ぼつぜんとして、顔を見合わせる）

舞台、暗転

舞台、明るくなる。

上手から、町長と樹木医（樹木医は鞆から聴診器と双眼鏡など取り出して、ケヤキの診察を始める。）

樹木医

（樹木医、双眼鏡で、梢の枝の先端を丹念に見ながら）

「ウーム」

（心配そうに）「先生、どんな具合でしょうか？」

樹木医

（難しい表情で）「ウーム」

町長

「あの、いのちに別状は？」

樹木医

「だいぶ、弱ってますな」

町長 (泣きそうになって) 「先生、なんとか助けてやって下さい」

樹木医

「万全は尽くしてみますが・・・」

町長

「ケヤキが弱ったのは、なぜでしょうか?」

(樹木医、ケヤキの根元を調べながら)

樹木医

「直接的な原因は、このアスファルトですな」

町長

(肩を落として) 「やっぱり」

樹木医

「あなたも、この町で育った人間なら、少しは樹木のことを知っておるでしょう。」

一本の樹木を支えるのに、どれほどの面積、体積の根っこが広がっておるかをね。

ドイツに行つてごらん下さい。一本の街路樹のいのちを保つために、どれほどの土の面積を要し、何枚の落葉が必要なのかまで研究されてるんですよ」

町長

「ああ、なんてこつた」(しょんぼりして)

樹木医

「しかしですな。人間にどうにもならん運命があり、寿命が尽きる日が必ず訪れるように、樹木にも運命や寿命があるものです。けして、永遠の命を保つことなんてないんですから。まあ、あまり悲観しないことですな。とりあえず、一番ききそうな栄養剤をうちましよう。それから、水分の補給です」

町長

「先生、このゲンゴロウのケヤキを死なせるわけにはいきません。何とか、何とか、よろしくお願いします」

(町長と樹木医、上手へ去る)

(夕方、うなだれた恵子が、ほうきをひきずりながら下手から出てきて、ケヤキの落葉の掃除を始める)

(そこへ、ゲンゴロウの幼馴染みの大工の棟梁が、大工たちを四、五人つれて、上手からにぎやかに話しながらやって来る)

恵子 「ああ、棟梁、こんばんは。今、お帰りですか？」

棟梁 「よつ、恵子さん。

(大工たちに) おまえたち、先に帰っててくれるか」

大工たち 「へい」

「それじゃ、棟梁、お先に」

(大工たち、下手に去る)

(棟梁と恵子、大工たちを見送る)

棟梁 「恵子さん、ゲンゴロウどんなあんばいだい？

倒れてから、そろそろ一ヶ月たつだろう」

「父は相変わらずです。病院をいやがって、看護婦さんに当たり散らすので、先生や主人と相談して、三日前、うちへつれて帰りました」

棟梁 「ハツハツハツ。病院でもガンコを通してたか。

いや、それほどの元気があるなら、大丈夫だ」

恵子 「棟梁、父が元気なのは口だけなんです。

やつぱり、体にはマヒがあつて(声を落として)今はまだ、寝たきりで・・・」

棟梁 「ゲンゴロウとわしは幼馴染みで、年もちがわん。ゲン

ゴロウのことは、他人ごとでない。明日の我が身よ。

七十越えるとな、いつ何が起るかわからんし、いつお迎えが来てもいいという覚悟は、もう何十年も前から、

そう五十年前に戦争が終った時からできておるものさ。それでも、恵子さん、これから一番たいへんなのはあんなただ」

恵子

「棟梁、ほんまのこと言うと、私、自信がないんです。私がつかりせなあかんのは、よう分かってます。けど、これから先、どうなるのかを考えると、目の前が真っ暗になってしまつて、逃げ出したくなるんです」

棟梁

（笑う）「ハツハツハツ」

恵子

（きつとして）「何がおかしいんですか。私は、ほんまに大阪へ帰ろうかと考えることもあるんです。『嫁』というのは、漢字では家に入れてもらえない女と書くでしょう。やつぱり、他人なんです。お父さんかて、私をお手伝いか賄いの女としか思つておられないんです。そんなら、誰ぞ雇つて下さればいい。私の代わりなんて、誰でもつとまります」

棟梁

「いや、すまん、すまん。笑つてすまん。つい、昔のこととを思い出してな」

（にわかには厳しい口調で）

棟梁

「しかし、あんたは考え違いをしとるぞ。人をほめたことのない頑固者のゲンゴロウが、一度だけわしに言ったことがある。

去年、あんたの姑のミチさんが亡くなられた時じゃ。

『うちの恵子は、セガレの源一郎には過ぎた嫁じゃ。源一郎は、どうもふわふわ腰の落ち着かんやつじゃが、女を見る目だけは、わしに似たらしい』つてね」

恵子

「ほんまですか？　ほんまにお父さんが、そんなことを・・・」

棟梁

「ほんまも、ほんま。あんた気がつかかなかつたかい。あんなと、姑のミチさんは親子かと思つくらい、似てたでわしら、うわさしたもんだ。」

「親子というもんは、好きになる女まで似るもんかな」
つて……」

「なんや、はずかしいわ」

「さつき、わしが笑ったのはな、もう何十年も前、あんなの姑のミチさんが、あんたと同じことをわしに言ったのを思い出したからよ。『この町で生きていく自信がない。くにへ帰りたい』つてね。ミチさんは、雪のふらない九州の育ちだったから、よほどここの雪がこたえたんだらうな」

「うそー。信じられへんわ。お義母さんは、この町のこの家に生まれたお人にしか見えないお人だった。そんなことがあつたなんて……」

「そうだろ。その時、わしはミチさんに『ゲンゴロウのケヤキ』のことを話してやったんだ。ゲンゴロウは、いじっぱりだからな。おそらく、自分のことを家族に話すなんてことはしない。だから、この話はセガレの源一郎も知らないだらうよ」

「お願い、棟梁。」

お義母さんにしてくれた『ゲンゴロウのケヤキ』の話、私にも聞かせて下さい」

「ああ、いいともさ」

（棟梁、ケヤキのそばに行つて、ケヤキの幹に手を当てる）

四

棟梁

「恵子さんは、戦後ずいぶんたってから生まれたから、戦争を知らないよな」

（恵子、うなずく）

棟梁

「今から、五十年以上前の昔のことだが……。終戦直後、ゲンゴロウもおれも十七、八だった。ゲンゴロウの兄さんたちは優秀でな。海軍や陸軍の士官だったから、皆、戦死しちまった。ゲンゴロウも中学から、陸軍の幼年学校とかに入って、都会へ行ってたんだ。ゲンゴロウのおやじさんは、町の顔役で愛国者だったんだ。」

ところが終戦で、世の中ひっくり返ってしまった。今までの考え方、くらし、そっくりそのままあかんものになった。」

ゲンゴロウのおやじさんは、いろんなことに責任を感じたんだろう。」

終戦から二日目、妻を道ずれに、毒を飲んでな……家に帰ってきたゲンゴロウが、両親の変わり果てた姿を見つけたんだ。ゲンゴロウがかわいそうで……。」

恵子

（涙ぐんで）「あんまりやわ。お父さん、かわいそう。」

棟梁

「なぐさめるもなにも、声をかけるのとはばかられた。おれはね。ゲンゴロウが、親たちの後を追って死にはしないかと、それが心配で　ずっとゲンゴロウを見張ってたんだ。そしたら……。」

恵子

「そしたら?。」

棟梁

「ゲンゴロウは、ずっつと泣きもせず黙りこくつたまま、茶毘にふされた両親の灰を袋に詰めてここへ来た。それから……。」

恵子

「それから……。」

棟梁

「このケヤキの下に穴を掘って……。」

恵子

「まさか……。」

棟梁

「灰をケヤキの根元に埋めた。」

恵子

「ほんまに?。」

棟梁

「ほんまに」

(恵子、ケヤキの幹に手を触れてなでながら)

恵子

「このケヤキは、お父さんにとって、ご両親でもあったんですね。」

「ずっと、お父さんを見守ってきたんやわ。このケヤキ・」

棟梁

「そうや」

恵子

「棟梁、いい話聞かせて下さって、ありがとう」

棟梁

「いやいや、恵子さん。嫁という漢字はな、家を支えて

いるのは女ということや。
家というのは、わしら大工が作るもんだが、ただ立派に箱を作るだけじゃ家とは言えん。家というのは、いのちの器。その命を生ませるのは男だが、命を守り育むのは女にしかできない尊いわざや」

恵子

「棟梁、私も家を支える女になれるでしょうか」

棟梁

「もう、とうになつてるさ。ゲンゴロウの保証付きだ。」

(恵子、棟梁、ケヤキを仰ぐ)このケヤキにも、ゲンゴロウにも、なんとかもう一度元気になつてもらわなきゃな」

恵子

うなずく。

舞台、暗転。

舞台、明るくなる。

(恵子、板壁のくもの巣をほつきではらっている)

(歌つように)「くもの巣をはらせるのは、家の恥、家の恥」

恵子

源太郎

「お母さん、おはよう」

恵子

（驚いて）「源太郎、なんて早起きなの」

源太郎

「ぼくね。じいちゃんに言われたんだ。

お母さんがたいへんだから、外の掃除はぼくがやりなさいって」

恵子

（感激した声で頭を下げる）「源太郎、ありがとう。お母さん、助かるわ」

源太郎

「あ、お母さん、拭き掃除はお父さんがやってるから、御飯の支度、おねがいしまーす」

恵子

「ええー、お父さんが、拭き掃除？ そんなことしなくていいのに・・・」

（恵子、下手に向かって駆け出す）

恵子

「あなたー、私がやりますから。置いていて下さい」

（源太郎、せっせとケヤキの下に落ちた葉をほうきで集めては、ちりとりに入れてケヤキの裏側へ運ぶ。

源太郎は、庭の片隅の土に穴を掘り、落ち葉などをそこへ運んでいるのだが、何度かその動作を繰り返す）

そこへ上手から、樹木医、棟梁、ツルハシや道具を持った男たちとやって来る。

棟梁

「おう、源太郎。お母さんの手伝いか。よしよし、いい子だ。あとは、おじちゃんたちにまかすときな」

源太郎、うなずくとほうきとちりとりを持って、下手へ走り去る。

棟梁、みんなをうながす。

棟梁

「さあ、現場へ行く前に一仕事たのむぜ」

一同

「へい」

棟梁

「しかし、町長つてやつは、なんてじれったいんだ」

男

「棟梁の言うとおりだ。『予算にない仕事だから会議にかけて』なんて、言ってる場合かよ」

男

「ケヤキが、死にかけてるっていうのに、そんなお役所仕事じゃな」

男

「しかし、夜明け前に叩き起こされた町長の顔は、見ものでしたね」

男

「おう、樹木医さんよ。さしあたって、どれくらい（アスファルトを）めくらせてもらったらいいかね」

樹木医

（すっかりおびえて）「さしあたってですね。半間ほど、これくらいお願いします。はい（チヨークで線を引く）」

（男達、手早く機械でアスファルトを切ったり、ツルハシではがしたりした後、一輪車でそれらを運び出して上手へ去る。樹木医は、地面に穴を掘り、栄養剤をうちこむ）

（そこへ、源一郎、恵子、源太郎が下手から出てくる）

五

源一郎、恵子

「ありがとうございました」

樹木医

「いやはや、こんなにたくさんの方が心配する患者は初めてです。」

このケヤキは、幸せものですなあ。後は、水をやって下さい」

源太郎

「ぼくが、やる」

樹木医

「そうか、あとはたのんだよ。雪の間、ゆっくり休ませて、春に新芽が出るかどうかが問題です。まあ樹齡が二百年ですから、寿命ということもあります。お大事に、（ケヤキを仰いで）新芽が出るといいですなあ」

（樹木医、上手へ去り、源一郎、恵子は、下手に去る）

源一郎

「それじゃ、恵子。おれも店に出かける。オヤジのこと、たのむな。昼にはちよつと帰るから」

恵子

「はい。」ご苦労様です。あなた、行ってらっしゃい」

源一郎

「恵子……」

恵子

「何？」

源一郎

「なんか、こつ、昨日とちがうんだなあ」

恵子

「何が？」

源一郎

「今日の君、きれいだよ」

恵子

「え？……」

源一郎

「じゃ、行ってくる。源太郎、母さんをたのむぞ」

源太郎

（元気よく）「はい、お父さん行ってらっしゃい」

（源一郎、上手に去る）

恵子

「源太郎、お母さんはおじいちゃんのようにすを見てるから、ケヤキの水やりお願いね。ケヤキが来年の春元氣になれば、おじいちゃんもきつと……」

源太郎

「まかせといて」

(恵子、下手に去る)

(源太郎、下手の方からバケツに水を運んで来る)

(源太郎が、ケヤキの下で水をまいていると、上手から
こどもたちがやって来る)

「源太郎、何してんの」

「あ、トトロの木に水やってんだ」

「ゲンゴロウじいちゃんのケヤキ、弱ってんだ。
お医者さんが、水をやるようになって」

「おれもやりてえ」

「私も手伝ってもいい?」

「いいよ」

(こどもたち、手に手に小さいバケツで水を運ぶ)

「そうだ、葉っぱさんたちにも、水をかけてやろう」

(源太郎は、ケヤキの落葉を集めた庭のすみにも水をやる) やがて、ケヤキの葉は、すっかり落ちてしまいました。短い秋が過ぎ、木枯らしが吹いて雪が降りました。雪にすっぽりおおわれて、町もケヤキも人々もじっと待ちました。

三月、長い長い冬がやっと終り、雪がとけ始めました。

(あちらこちらに、まだ、雪が残っている)

(上手より、幼稚園児と先生がやってくる) B・G・
M・に「さんぽ」のマーチ

「みなさん、ほら見て、この町で一番古いケヤキの木で

幼稚園の先生

す

園児

「わあ、でっかい」

幼稚園の先生

「この木は、二百歳くらいだそうですね」

(園児たち、歓声をあげて、ケヤキにかけよりさわる)

(恵子、下手より顔をのぞかせる)

(下手より、ゲンゴロウの声)

ゲンゴロウ

「恵子さん、恵子さん。おもてが、にぎやかじゃが・・」

恵子

「お父さんのケヤキで、たくさん幼稚園の子供たちが遊んでるんです」

ゲンゴロウ

「そうかそうか。わしも表に出てみたい」

恵子

「雪がとけてしまったら、私が車椅子を押しておつねします」

ゲンゴロウ

「ありがとう、恵子さん」

(恵子、下手より出てきて、心配そうにケヤキを見上げる)

幼稚園の先生

「おじゃましています。赤松さん」

恵子

(振り向いて)「ああ、どうぞ、どうぞ」

幼稚園の先生

「おじいちゃまの具合、いかがですか?」

恵子

「表にでられる日を楽しみに、家の中でリハビリにがんばってるんですよ」

幼稚園の先生

「それは、良かったです。」

私、このケヤキ大好きなんです。山仕事に行つてた祖父が言つてました。

「ケヤキという漢字は、手を上げている木と書くんだ」
つて、ケヤキは、自分の枝をふりあげて、私たちにガンバレとはげましてくれているんですよね」

（にっこりして）「いいお話ですね。ほんとうに、ガンバレつて言つてるみたい」

幼稚園の先生

「それじゃ・・・また、ケヤキでこどもたちを遊ばせていただいてもよろしいですか？」

「どうぞ、どうぞ。父もお子さんたちの声を聞くとうれしいようですから」

恵子

（幼稚園の先生、子供達をつれて、上手へ去っていく。いれかわりに、上手より源一郎、源太郎が入ってくる）

六

源一郎

「ただいま」

源太郎

「おかあさん、ただいま」

恵子

「ふたりとも、おかえり」

源一郎

「どう、変わりない？」

恵子

「ケヤキは、変わりないみたい。まだ、新芽も見えないの。
生きているのかどうか、眠つたまま覚めへんのか・・・」

源一郎

「おやじは？」

恵子

「お変わりない。表に出たいと言われるわ」

源一郎

「そつだらうな。道路の雪も消えてきたし、明日でも外へ車椅子出してみるか」

恵子

「けど、あなた。まだ、ケヤキの新芽が」

源一郎

「恵子、それを気にしてたら、いつまでもオヤジを家の中に閉じこめてしまうことになるかもしれないぞ。木だつていつか枯れる。人だつていつか死ぬ。それを、おそれていたら、人間、生きていけなくなるだろ。」

それくらい、オヤジは分かっているし、あるがままを受け入れる覚悟はあるはずさ。明日、オヤジを外につれて出よう。いいな」

恵子

「はい」

（源一郎、恵子、源太郎、下手に去る。舞台暗転）

（舞台、明るくなる。小鳥のさえずる声）

（下手から、恵子がゲンゴロウを車椅子にのせて入ってくる。ゲンゴロウは、綿入れをはおり、うれしそうに、まわりを見回して居る。）

恵子のうしろに、源一郎、ゲンゴロウのリハビリ用のステッキを持ってついでくる。

ゲンゴロウの車椅子が中央にかかったところで、上手から、棟梁と大工たち、町長、入って来る）

棟梁

「ゲンゴロウ」

ゲンゴロウ

「心配かけたな」

（棟梁、首にかけた手ぬぐいを目にあてる）

町長 「ゲンゴロウさん。いやあ、元気になられてよかった。ところで、このケヤキですが、

町の文化財、宝として指定してですな、次の世代への遺産として、厳重な維持管理をしたいと思いますとおるんです。いかがですか。

樹木医とも相談したんですが、今年度、予算をくんで、

このケヤキのまわりに、囲いを作りましてですね・・・」

ゲンゴロウ

「町長さん。悪いが。おことわりする。このケヤキは、たくさんの子供達の友だちがいてな、寿命が尽きて枯れ果てるまで子供たちと共に生きる方がいいんじゃない」

町長

（困った顔をして）「そんな、ゲンゴロウさん。このケヤキは、町の財産として・・・」

（ゲンゴロウ、町長を無視し、恵子の方を振り返って）

ゲンゴロウ

「恵子さん、すまんがケヤキのそばまでつれて行ってくれるか」

恵子

「はい」

（恵子、車椅子を押してケヤキのそばに寄る。後ろから、源一郎がついていく）

（ゲンゴロウ、ケヤキに手をあてる）

ゲンゴロウ

「ひさしぶりじゃなあ。ありがとう・・・」

源一郎、ステッキを・・・。わしは、立ってみる」

恵子

（あわてて）「お父さん、だいじょうぶですか？」

ゲンゴロウ

「だいじょうぶ、だいじょうぶ」

（ゲンゴロウ右手にステッキを持ち、源一郎に助けられながら、四苦八苦してどうにか立ち上がり、ケヤキに再び手をふれる。

一同「おー」という歓声と、拍手）

棟梁

（思わず大声で）「ゲンゴロウ、ばんざーい」

（恵子、源一郎に助けられながら、ゲンゴロウ車椅子に座る。そこへ、孫の源太郎がバケツをかかえて下手より走って来る）

源太郎

(興奮して)「じいちゃん、母さん、見て、見て」

恵子

「どうしたの、何？」

ゲンゴロウ

「やっっ」

棟梁

「ケヤキの子だ！」

源太郎

「去年、じいちゃんの庭のすみで見つけたの。冬の間、土や葉っぱといっしょに家に入れといたんだ」

(ゲンゴロウ、棟梁から手ぬぐいを取り上げて、目にあてる)

棟梁

「さすが、ゲンゴロウの孫や。ゲンゴロウ、良かったな」

ゲンゴロウ

(源太郎を右手で抱き締めて、力強い涙声で)

「恵子さん、ええ子を生んで育ててくれてありがとう」

(恵子、涙する)

(源一郎、源太郎を抱き上げる)

ニ「となりのトトロ」 全員合唱

歌いながら出演者、会場の子供達を、舞台上に上げる

登場人物

ゲンゴロウのけやき

赤松源五郎

源一郎

恵子

源太郎

町長

樹木医

棟梁

小学生四、五人

幼稚園の先生

園児たち

近所の人々

大工たち